

昭和59年度
収蔵品解説会

- 5月28日(土) 三味線解説会
講師：又吉真三氏
- 6月9日(土) 絵画解説会
講師：神山泰治氏・真栄平房敬氏
- 7月21日(土) 「琉球芸能の世紀」展示解説会
講師：池宮正治氏
- 9月29日(土) 昆虫標本解説会
講師：東 清二氏
- 12月8日(土) 土器解説会
講師：知念 勇氏
- 3月2日(土) 紅型解説会
講師：渡名喜 明氏

収蔵品解説会ひらかれる

4月28日、装いも新たになった博物館文化講座のなかで「収蔵品解説会」が初めて催されました。今回は、県指定文化財の三味線「江戸与那」志多伯開鐘」および戦前の五開鐘の一つである「盛鳴開鐘」を中心に沖縄の三味線について解説しました。

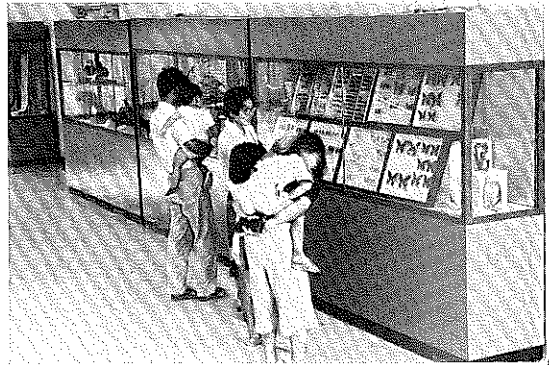
夜明けをつける寺の鐘を沖縄では開門鐘(ケージョーガニ)と言います。開門鐘は、四方の静寂を破り、いやが上にもよく響き渡ります。尚家は、丁度その開門鐘のようによく響き、よく鳴る五挺の三味線に「……開鐘」と名付けました。「盛鳴開鐘」は尚家伝来の五開鐘のうちの一つで、「志多伯開鐘」は準開鐘、「江戸与那」は開鐘外の名器とされています。いずれも、三味線ファンにとっては見逃せないものばかりです。

県文化財保護審議員の又吉真三氏の解説の後、黒島惇氏に実際に弾いてもらいました。保存のため少々緩めにセットされていたのですが、名器が奏でるいにしへの音に参加者は満足している様子でした。

「新収蔵品展」開催される

昭和58年度の新収蔵品を一堂に展示公開する「新収蔵品展」が、去る5月15日から27日までの会期で、2階ロビーで開催されました。染織品や厨子襲のほかは、ケースを利用し、およそ1,000点を展示して資料の紹介につとめました。

58年度は、2,480点が収蔵されましたが、その90パーセント以上の2,300点は、寄贈品です。そのさらに過半数は、昆虫標本で占められています。佐藤文保氏からは、昆虫標本1,727点の寄贈がありました。また、吉戸直氏からは染織品、安良城政効氏からは辞令書や家譜などの歴史資料、大浜道子氏からは書書類がそれぞれ寄贈されました。当館では、4氏に対して感謝状を贈呈しました。そのほか多くの方々から貴重な資料が寄せられましたので、可能な限り展示し、公開するようにしました。



中国四川省の研究所との間で資料を交換した「爬虫類標本」や購入品の「鳥獸剝製」や「染織品」も展示しました。なお、当館では、多くの方々に見ていただくこと、一部を展示替えし、6月17日まで会期を延長しました。

資料紹介

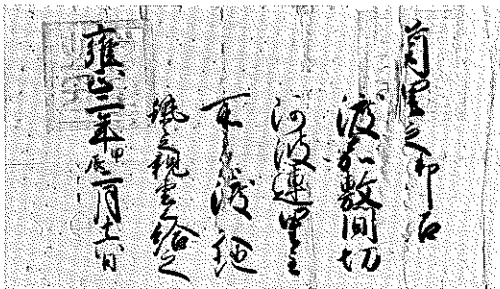
歴史資料

安良城家文書

安良城家（当主は安良城政効氏）に伝存されてきた古文書の存在が確認されたのは、昭和57年7月に実施された当館の定期燻蒸によってである。個人で所蔵する古文書等の燻蒸を呼びかけたところ、安良城家文書等が持込まれたというわけである。いずれも貴重な資料ではあるが、保存状態が悪く、虫害・風化の洗礼をうけて、保存修理が緊急を要するものばかりであった。結果的には、当館の強い希望もさることながら、個人で修理し、

これを半永久的に保管するには限界があるということで、当館への寄贈となった次第である。

安良城家文書の概要を略記すると以下の通りである。①家譜は3冊あり、7世政房を系祖とする「蔡氏家譜」(墨付き1紙目に「首里之印」が押印)とその分家の家譜2冊(いずれも「系紀之印」のみ押印)である。②「蔡姓家譜仕次」は3冊あり、内2冊は同内容の添削済みと糾合済みの仕次で、他の1冊は別内容の糾合済み仕次。③辞令書は11通あり、系祖の7世政房から12世政直までの、雍正2年(1724)から同治6年(1867)に至る143年間に発給されたもの。これだけまとめて伝存された辞令書は比較的少ない。④乾隆50年(1785)の「墓敷譲渡証文」1通。⑤11世政綱が嘉慶11(1806)から15年にかけて勤務したときの「御仮屋守日記」(表欠にて仮題)は、奥書により同日記の最初のものと同判明。



渡嘉敷間切の阿波連里主所安堵辞令書

研究コラム

パナリ焼土器について

— 沖縄県の土器目録作成調査から —

昨年度当館は国庫補助事業として、県内の博物館等が所蔵する沖縄県の土器目録作成調査を実施し、数百点の完形または復元土器を「沖縄県の土器目録」として、収録刊行した。

この目録には、遺跡から出土した土器のうち、未報告のものを除外したことで、調査が短期間で時間的な制約があって、未収録のものを多くのこした。

この調査によって、現在県内には1千個余の完形および復元土器のあることが大まかではあるが把握できたことは一応の成果だと考える。

これらの土器の約半数はパナリ焼で、しかもその大半は完形品であることは、この土器が近年まで制作使用されていたことを物語っている。

これだけ大量に現存するパナリ焼土器がどういふ訳か考古学的には、ほとんど研究の対象とはされず、この土器に関する考古学的な研究論文は皆無に等しい。したがって、この土器については型式分類はなされず編年の位置づけも曖昧のままである。

その原因の一つには、博物館等に収納されているパナリ焼でもその大半が出所不明となっていることである。これらは遺跡などからの発掘資料ではなく、墓地、集落跡からの採集品であるためできるだけ出所を明さないで、取引されることが多いようである。したがって、パナリ焼の大半は学術資料としての第一条件を欠落した資料ということになる。

出所不明であるということが考古学研究の対象としては魅力を失わせている要因ともいえよう。

現在は使用されていない土器で、これだけの数の土器が現存する例は日本ではめずらしい。これらの土器は幾種類かの型式に分類が可能なことと、近世の遺跡から多く出土する土器破片と比較検討をすることによって、パナリ焼の編年の位置付けが可能であると考えられる。

県内に数百点は現存するとみられるパナリ焼きの約2/3は、生産地である八重山諸島にあり、その意味では、地元の研究者が他の利を得ていると言えよう。

今回の調査で感じたことは、これらのパナリ焼

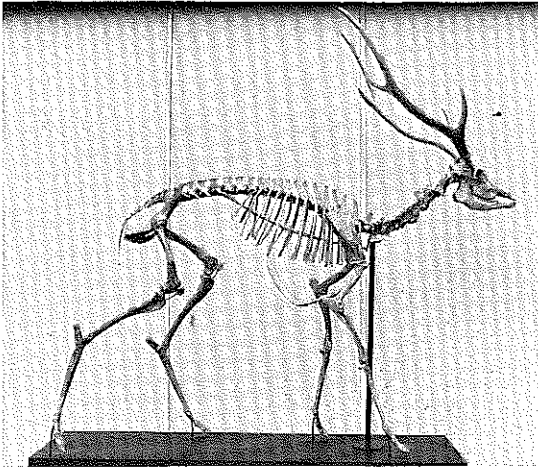


は、聞き取り調査をすれば採集地の判明するものが以外と多いのではないかと考えられる。パナリ焼土器の解明には、採集地の調査・実測図の作成・写真撮影・焼成及び胎土の観察等土器1個ずつの台帳を作成するという基礎的で地味な作業が必要である。これらの作業も大変時間と根気を要する作業であり地元が有利なことは言うまでもない。

写真の土器は石垣市立八重山博物館が所蔵する墨書銘のあるパナリ焼土器である。「とし二十一才女子おなり、乾隆?三十五年」とある。この土器は蔵骨器であること。蔵骨器としての使用年代が明記されていること、その器に納められた人が、女性であることがわかる興味深い土器である。通常蔵骨器は、製作当初からの蔵骨器とその他の用途に使用された土器が蔵骨器として転用されるものがあるがこの土器は後者の例が考えられる。

(知念 勇・学芸員)

化石鹿「ニッポンムカシジカ」のレプリカの寄贈

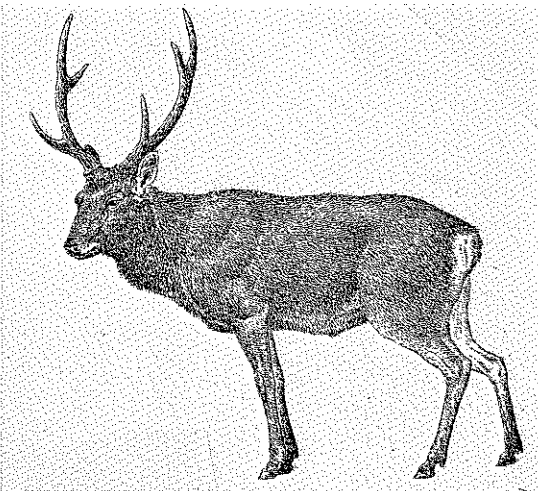


ニッポンムカシジカは、更新世初期(約200万年前)より東アジア一帯に広く分布し、日本ではウルム永期(5~6万年前)まで栄えていました。しかし、更新世末期(2万年前)に、現存のニホンシカに入れかわり絶滅してしまいました。

ニホンシカとの主な違いは、角の形にみとめられますが、体格などはほぼ似ています。

今回、沖縄産化石鹿との比較及び展示に利用してもらいたいということで、横浜国立大学教授長谷川善和氏と東京都在住の小林悦夫氏の好意により、両氏からこのニッポンムカシジカのレプリカ(写真参照)が当館に寄贈されました。

標本は、栃木県安蘇郡葛生の採石場から出土したのですが、沖縄や日本の化石鹿を調べる上で大変貴重な資料となるでしょう。



ニッポンムカシジカの復元図
(鹿間時夫、1979:「古脊椎動物図鑑」より)

— 研究室の窓から —

美術工芸(染織)

与那嶺一子(学芸員)

私が、琉球の工芸に初めてふれたのは、先日亡くなられた芦沢銈介氏の創作活動を報じるテレビによってであった。鮮やかな染め物の美しさを知ると共に、氏がこれほど沖縄を内包し、さらに新しい染め物を創っていることへの驚きと、何も知らなかった自分への恥かしさが後に残り、いつか、この仕事にたずさわってみたいと思ったものだった。

それが契機となり、大学で織りを学び、それを生かし、教職を通して子供達に琉球文化の素晴らしさの一端を知らせることができたらと考え、八重山へ帰郷したのだが、現状ではなかなかそこまで手がまわらず、次第に自分は何をしているのだろうかという疑問符が多くなっていった。

今回、転勤により、博物館で再び染め織りを学ぶ機会を与えられ、喜びに絶えない。博物館の構成メンバーは思っていたより若く、行動派である。未熟な私を心よく受け入れ力強くバックアップして下さい。まだ、博物館の内容も十分に把握しておらず、琉球文化の歴史、現状など、今後の研究に課題を残すところが大きいですが、いつしか、重ねた研究をもとに、明日をにやう子供達に「琉球文化」を伝えられたらという思いでいっぱいである。

人事異動

学芸員 津波古 聡 転入
県立森川養護学校から

学芸員 与那嶺一子 転入
石垣市立石垣第二中学校から

主 事 上間 尚子 転入
教育庁財務課から

主任学芸員 大城 逸朗 転出
県立教育センターへ

主 事 村山 佐代 転出
県立教育センターへ

清掃業務 金城 ヨシ 退職
宿直警備 玉城 正篤 退職

沖縄県立博物館だより No.21

発行年月日 昭和 59 年 9 月 29 日

編集・発行 沖縄県立博物館

住 所 〒903 那覇市首里大中町1-1

TEL. 0988-86-4353

84-2243